

Title	上代書記の基礎的研究 : 『日本書紀』を中心に
Author(s)	是澤, 範三
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/43332
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	是 澤 範 三
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 16700 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	上代書記の基礎的研究—『日本書紀』を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 蜂矢 真郷 (副査) 教授 金水 敏 教授 後藤 昭雄 教授 湯浅 邦弘

論文内容の要旨

本論文は、『日本書紀』を中心とする上代文献の「書記」の問題について、漢文助辞がどのように用いられるか、つまり、漢文本来の用法であるか和化的用法であるかを検討し、『日本書紀』の巻による差違の全体の中でとらえようとするものである。

第一篇「上代における漢字使用の様相」は、第一章「『若』字——比況の場合——」、第二章「『若』字——疑問推量の場合——」、第三章「『蓋』字——『日本書紀』を中心に——」からなり、第二篇「和語と漢語の意味領域と語法的相関」は、第一章「『モシ・ケダシ・ハタ』と『若・蓋・為当』」、第二章「複音節辞——いわゆる中国口語語彙を中心に——」、第三章「ニキとニギ——伊予の地名『熟田津』を中心に——」からなる。冒頭に「序説」を、末尾に「まとめと展望」を付す。(400字詰換算約330枚)

第一篇は、「若」字の比況の用法と疑問推量の用法と、「蓋」字の疑問推量の用法を中心に検討し、とりわけ、和化的用法である「若」字の疑問推量の用法が『日本書紀』のⅡ群に偏在することや、「蓋」字の疑問推量の用法がⅡ群とⅢ群とで表記様式が異なることなどを指摘して、Ⅱ群と和化漢文とされる『古事記』などとの関係性についても述べる。第二篇は、和語と漢語との意味と用法とについて、漢語と和語との対応の中から、和語もしくは漢語の用法を受けて同化された用法が生まれる過程などを追究する。第二篇のうち、第一章は、疑問推量の用法について述べる第一篇との連続性を深く持ち、第二章は、そこにとり挙げる複音節辞が『日本書紀』のⅢ群に偏在することについて述べている。

論文審査の結果の要旨

『日本書紀』の研究は、『古事記』の研究に比して、国文学的研究も国語学的研究も些か遅れていると言わなければならない。その意味において、国語学の分野において『日本書紀』を主な研究対象とすること自体がそれなりの価値を持つと言ってよいであろう。

『日本書紀』の国語学的研究は、近年、森博達氏の α ・ β 群、榎本福寿氏のⅠ・Ⅱ・Ⅲ群という、いわゆる「書記区分論」の最近の研究によって進展してきている。すなわち、正格漢文を志向して書かれていると言われる『日本書

紀』が、森氏の α 群、榎本氏の III 群のような正格漢文を志向していると見られる巻と、そうではない他の巻とがあって、巻によって差違があることが明らかにされつつある。本論文は、「如」「若」「蓋」「為当」さらには「耳・而已」「～復」「～須」「～使」等々を中心に、漢文助辞の漢文本来の用法と和化的用法とについて、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『懐風藻』『風土記』『続日本紀』などの上代文献における用例を丁寧に見た上で、『日本書紀』の巻ないし群における様相を検討することによって、和化的用法である「若」字の疑問推量の用法が『日本書紀』の II 群に偏在するなど、これまでに知られていなかったことをいろいろと明らかにしていることが評価できる。また、『日本書紀』の II 群と和化漢文とされる『古事記』などとの共通性を考えるなど、広く上代文献を見て検討していることも注目される。森氏や榎本氏の「書紀区分論」の上に立って、正格漢文を志向しているとされる『日本書紀』が巻・群によって様相を異にしていることを、新たな面から指摘していると言える（なお、申請者は、本論文の第一篇第二章に当たる部分を主な対象とし、同第一章に当たる部分を参考として、古事記学会奨励賞を受賞して、学会でも既に評価されている。因みに、同賞は、該当者なしの年度があり、現在までの受賞者は申請者一人だけである）。

一方、本論文の体系性・統一性の点で問題がないではない。第二篇第三章は、漢語の意味と和語の意味との差違について検討するという点では本論文の方向に合っているとも言えるが、漢文助辞についての考察ではない点で他の章と異なり、体系的であるとは言にくい。「書紀区分論」の説明が何箇所にもあることも問題であろう。しかしながら、これらの問題によって、学会での評価を含めた本論文の価値が損われているとは言えない。今後、新たな上代国語の文字・表記論として、研究が大成されることが期待される。

なお、2002年2月15日、本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。以上のようなので、本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。